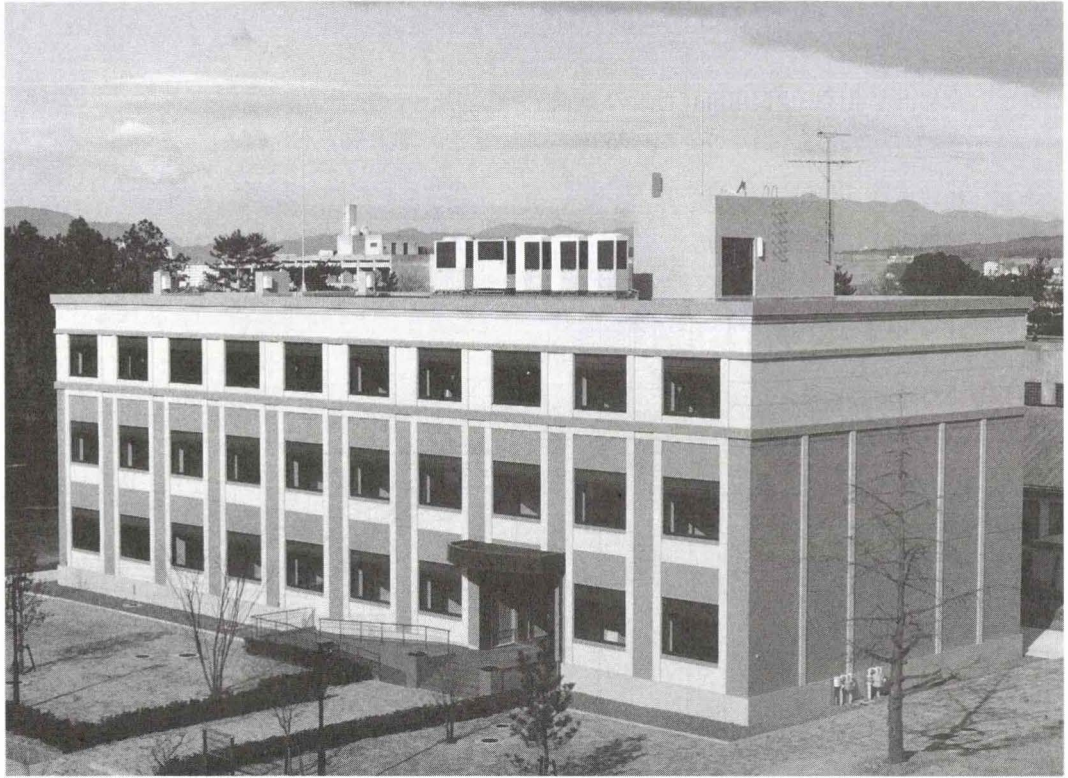


京大広報

No. 486

京都大学広報委員会



防災研究所附属地震予知研究センター研究棟

目次

<大学の動き>	—京都大学の百年（第9回）—
清風会館の完成……………981	『史料神陵史』と舎密局～三高資料……………983
<部局の動き>	計報……………984
防災研究所附属地震予知研究センター	平成7年度創立記念行事音楽会の開催……………985
研究棟の完成……………981	日誌……………986
<榮譽>	<コラム>
河合隼雄名誉教授、常脇恒一郎名誉教授が	時代の流れ 宮嶋孝一郎…986
紫綬褒章を受章……………982	<随想>
<紹介>	「1月17日」
大学院人間・環境学研究科……………982	名誉教授 山田善一…987

<大学の動き>

清 風 会 館 の 完 成

本学の教職員の宿泊、会合の用に、また、本学に用務のある他大学等の教職員（外国人研究者を含む。）も利用できる施設として「清風会館」が清風荘の西側旧宿舍跡地に完成し、6月1日（木）より開館する運びとなった。この会館には、18室の宿泊室の他に会議室、ランドリー室、自販機コーナーなどがあり、教職員等の福利厚生の場として貢献することが期待される。

なお、同会館の利用等詳細については経理部経理課第一用度掛（内線2133）に照会されたい。

また、職員会館の宿泊利用は5月20日（土）の宿泊をもって終了する。

会館の概要は次のとおりである。

場 所

京都市左京区田中関田町16番地の2

電 話 075-721-0661

規 模

建物面積 延約1,000㎡

構 造 鉄筋コンクリート造地上3階

宿泊室

18室（冷暖房設備付）

種 類	室 数	面 積
1 階 会 議 室 約60人収容可	1	85㎡
2 階 シ ン グ ル ツ イ ン	6	14㎡
〃	2	27㎡
〃	1	41㎡
3 階 シ ン グ ル ツ イ ン	6	14㎡
〃	2	27㎡
〃	1	41㎡



<部局の動き>

防災研究所附属地震予知研究センター
研究棟の完成

このたび、防災研究所附属地震予知研究センター研究棟（鉄筋コンクリート造3階建1,648㎡）が宇治地区に完成し、4月27日（木）午前10時30分からの研究棟案内に続き、11時30分から防災研究所会議室において竣工披露式を挙行了した。

披露式は、田中寅夫防災研究所長の挨拶のあと、宮本武明化学研究所長の祝辞、住友則彦地震予知研究センター主任の経過報告等があり、終了後、午餐会を開催した。

午餐会は、茂木清夫日本大学教授（地震予知連絡会会長）の発声で乾杯、事務局、宇治地区研究所からの招待者、防災研究所教職員等関係者約100名が出席して、なごやかに歓談した。

（防災研究所）

< 栄 誉 >

河合隼雄名誉教授，常脇恒一郎
名誉教授が紫綬褒章を受章

河合隼雄名誉教授（元教育学部教授，臨床心理学）及び常脇恒一郎名誉教授（元農学部教授，植物遺伝学）に，我が国学術の向上発展のため顕著な功績を挙げたことにより，平成7年4月29日紫綬褒章が授与された。



< 紹 介 >

大学院人間・環境学研究科

かつての「環境」に関する議論は，生物世界や人間活動の特異性を時間的・空間的に表現するための純粋な学問的スキームとして展開されてきた。しかし最近の環境論は，地球科学的，生命論的，文明論的な規模に広がるとともに，人間の存在と運命に関わる哲学的な取り組みを必要とするような現代世界の根本問題を指示するものとなってきた。これまでのように，「自然」の「人間」に対する関係を「環境」として，静的・客観的に考察するやり方にとどまれば，科学技術と経済活動が錯綜してさまざまな交互作用を織りなす現代世界にあっては，両者の関係をもはや安定して持続させることは不可能である。解決策として，仮に自然が人間に対して優位であるべきだと言い切ると，人間は科学・技術を捨てて再びかつての閉鎖的な自然的生活世界に戻らざるを得なくなるし，そうかといってこの逆を主張すると今日のように自然破壊が際限なく進行する。自然と人間との関係が相互を損なわない仕方でも成立するための，環境の多次元的な重層構造の意味を長期的な展望のもとにその深部に至るまで正しく捉えない限り，これからの人間活動は出口の無い閉塞状況の中で硬直し，躍動性を失うか，自然と文明の破壊に向かってひた走ることになるであろう。人間・環境学研究科の設立は，自然と人間との関係を「人間・環境」という新しい理念のもとで捉え直そうとする認識論の展開であると同時に，今世紀から21世紀に向かう文明への根元的な問いかけでもある。

本研究科の目的は，具体的・実践の方策を学術的に追求し上記の問いに答えることにある。もう一つの目的は，「人間・環境学」という一つの見通しのもとに個別の科学を有機的に総合する，いわゆる学術の総合を志向し，個別科学の網では捉えられなかった複雑な新しい現象を学際的・総合的に研究することである。特に後者の目的において，本研究科は，研究機関であると同時に，研究科とその運営自身が研究対象であるとも言える。

以上の趣旨と方法を掲げて本研究科が京都大学における最初の独立研究科（学部を持たない大学院）として発足したのは，平成3年4月のことである。設置当初，先ず人間・環境学専攻が，そして平成4年10月に文化・地域環境学専攻が発足し，今日に到っている。また，本研究科は基幹講座の他に，協力講座として，本学総合人間学部・東南アジア研究センター・アフリカ地域研究センター・医学部附属病院医療情報部・人文科学研究所・ウイルス研究所附属免疫不全ウイルス研究施設・放射線生物研究センター・放射性同位元素総合センター・留学生センターの教官の参加を得ており，平成6年度からは客員部門に京都国立博物館と奈良国立文化財研究所の機関参加を得ている。

本研究科が現在進めている研究教育の主題とそれを分担する各研究指導分野の役割は，『研究科を案内する冊子』（大学院掛を通して頒布の用意がある）に詳しいので，研究科の規模と構成（平成7年4月1日現在）のみを下表に紹介する。なお表中の（基），（協），（連），（客），（寄）はそれぞれ基幹講座，協力講座，基幹・協力連携講座，客員部門，寄付講座である。

〔人間・環境学専攻（第一専攻）〕

専任教官：（基）24名，（協）36名

学生定員：博士前期課程61名，同後期課程31名

講座【研究指導分野】の名称：（基）人間存在基礎論講座【人間存在基礎論】，（基）動態環境論講座【動態環境論】，（連）人間社会論講座【社会構造，社会情報処理，社会発展】，（連）人間形成論講座【人間形成，人間行動】，（連）自然・人間共生基礎論講座【生活空間，生命相関，エネルギー・物質利用】，（連）環境情報認知論講座【認知機構，

言語情報, 認知情報処理], (連) 自然環境論講座【生物圏, 地球圏, 自然構造基礎】, (連) 分子・生命環境論講座【生命環境, 分子環境, 相互作用】

〔文化・地域環境学専攻 (第二専攻)〕

専任教官: (基) 21名, (協) 66名

学生定員: 博士前期課程68名, 同後期課程47名
講座【研究指導分野】の名称: (基) 文化・社会環境論講座【文化・社会環境論】, (基) 環境物性解析論講座【環境物性解析論】, (基) 文化環境言語基礎論講座【文化環境言語基礎論】, (基) 環境保全発展論講座【環境保全, 環境解析, (客) 東洋文化財保全】, (協) 文化人類学講座【文化人類学, 比較文化】, (協) 日本文化環境論講座【歴史環境, 文化表現, 文化環境】, (協) ヨーロッパ文化環境論講座【社会環境, 文明形成, 欧米文化表現】, (協) 東南アジア地域研究講座【生態環境, 社会生態, 統合環境, 地域発展, 人間環境】, (協) アフリカ地域研究講座【文化・社会生態論,

生業生態論】, (寄) 国際予防栄養医学講座

学生募集は年2回に分けて実施している。これまでの選抜試験で特筆すべきことは、競争率(志願者/合格者)が高いことである。過去9回の競争率は、4.1~5.3倍の間であって、しかも特定の研究指導分野への偏りは無い。応募者数が最も多いのは本学の各学部であるが、地理的な分布をみると、東北大学, 東京大学, 九州大学等, いわゆる旧七帝大と称される大学からの応募が目立つ。これらの大学が多数の学部から構成される総合大学であることを考えると, 応募者が総合大学の意義と特質を無意識の裡に体得していて, 本研究科が総合科学性を積極的に打ち出した, その大学院の性格と機能に興味をかきたてられ, ここで研究しようという意欲をいだいたのではないかと考えられる。平成7年度中には, 「京都大学博士(人間・環境学)」の巣立ち始めることが期待される。(大学院人間・環境学研究科)

—京都大学の百年(第9回)—

『史料神陵史』と^{せいみやく}舎密局~三高資料

「三高関係の資料は, その創立以来の夥しい数が, 現在京都大学教養部に保管されており, 種類と数の豊富さは他に類を見ない。単に三高及び旧制高等学校の資料としてだけでなく, わが国近代教育史にとっての貴重な史料といえるものである」。引用したのは, 旧制高等学校資料保存会が行った, 旧制の第三高等学校およびその前身諸学校関係史料の保存状況についての報告である(『旧制高等学校史研究』第6号, 1975年)。これらの史料は, 現在は総合人間学部図書館2階の「舎密局~三高資料室」に保管されている。官庁等との往復書類, 各学校の規則, 事務書類等, 簿冊の形になっている原史料が数千点現存している。30をこえる旧制高校の中でも, 三高関係史料が抜群の保存状況にあるのは, 戦災や疎開を免れたこと, 大学紛争の際にもいち早く史料の移動が行われたこと, また同窓会組織が活発で, 何回か学校史の編纂が実現したこと, などがあげられるであろう。

近年編纂された三高の沿革史としては, 神陵史編集委員会編『神陵史—第三高等学校八十年史—』(1980年)があげられる。同書は, 1,000頁をこえる大冊で, 前記の貴重な史料を駆使しながら, 1868年の舎密局の開講から1950年の三高の終焉まで, 平易な文章で書かれた通史である。そして, 昨年8月に新たに, 神陵史資料研究会によって, いわば史料集ともいふべき『史料神陵史—舎密局から三高まで—』が刊行された。実は, 史料集の役割を果たすものとしては, 50年以上前の1942年に加藤竹男氏・林屋辰三郎氏によって『稿本神陵史』の編纂が完了していた。これは, 原史料を前身各学校ごとに取捨選択, 配列し, 若干の解説を付しているが, 公刊されることはなく, その存在が広く知られるには至らなかった。

今回の『史料神陵史』は, 『稿本神陵史』のうち, 三高創立期までの分を翻刻したものである。舎密局・洋学校から始まる各学校に対する設立の発令, 規則, 職員・生徒数, 経費, 学科課程, 図書, 主要

な式典・行事などに関する史料が多数掲載されている。編者は翻刻にあたって、現存する原史料と照合して正確さを期し、注を新たに付して掲載史料の典拠を「舎密局～三高資料室」における整理番号とともに明記している。さらに巻末には詳細な人名索引が載せられている。編者のこれらの尽力によって、単なる旧版の復刻ではなく、より厳密な、そして利用しやすい史料集となったことは言うまでもない。また、本文中には引用されている原史料の写真も数多く挿入され、視覚的な面からも当時の雰囲気が分かるよう配慮されている。

さて、内容に目を移してみると、様々な興味深い事実が浮かび上がってくる。例えば、1885（明治18）年の関西に東京帝国大学に次ぐ大学を創立する動きに関する史料が掲載されている（506頁～510頁）。「関西大学創立次第概見」と題された史料は、当時大阪中学校と称していた三高の前身校が大学となるために必要な措置について作成していた意見書である。これに対して、当時の文部卿大木喬任が太政大臣三条実美に「今般該校ノ組織ヲ変更革シテ大阪大学部校ト改称シ、逐次法理医文等高等ノ学科ヲ設置シ一大学トナスノ見込ヲ以テ、差向予備科及一二高等学科ヲ設置致度」と伺書を提出していることから分かるように、文部省も大学設置に前向きであった（付言すれば、文部省の書庫は関東大震災で焼失しており、それ以前の史料は関係の学校に保存されている写しを見るしかない。そういった意味でも三高関係の史料は非常に貴重であるといえる）。その結果、大阪中学校は大学分校と改称し、予科を設置したのだが、翌年、森有礼文相による中学校令の公布で、本科を置かないまま第三高等学校に改編され大学への道は頓挫してしまった。しかし、関西に大学を設置する構想は、実際に京都帝国大学が創立されるより12年も前から文部省にも存在しており、三高の前身校が大学に改編される可能性を常に持っていたことを示している史料として興味深い。

なお、三高関係の史資料としては、以上のような文書史料のほかに、明治期の物理実験機器なども著名である。三高およびその前身校は、沿革に関する史資料の宝庫と言っても過言ではないであろう。

（百年史編集委員会 西山 伸）

百年史編集委員会からのお願い

百年史編集委員会では、『京都大学百年史』編集のための史料収集を行っております。書翰、日記、写真、ピラ等、京都大学にまつわる史料をお持ちか、あるいはその所在をご存じの方がいらっしゃいましたら、ぜひご協力をお願いします。ご協力いただける際は、百年史編集史料室（附属図書館4階、内線2651）までご連絡ください。

訃 報

豊田龍之助 名誉教授

本学名誉教授 豊田龍之助 先生は、4月22日逝去された。享年88。

先生は、昭和8年京都帝国大学理学部化学科を卒業後、同大学理学部副手、助手、京都大学化学研究所講師を経て、同28年京都大学分校（教養部）教授に就任、同45年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。

本学退官後は、昭和47年から同57年まで神戸学

院大学教授を務められた。

先生の専門は有機化学で、有機アンチモン化合物の合成、カルボン酸塩の熱分解反応機構の研究において優れた研究業績を残され、その発展に寄与された。先生は化学的なものの考え方と化学のあり方とを教えることを重視し、有機化学反応を個別的ではなく統一的に説明する斬新な授業を行い、有機化学教育に大きな効果をあげられた。

これら一連の研究教育活動、学術上の貢献に対し、昭和53年には勲三等瑞宝章を受けられた。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

（総合人間学部）

平成7年度創立記念行事音楽会の開催

本学では、6月18日(日)の創立記念日を祝い、下記の音楽会を開催いたします。本学学生・教職員の来聴を歓迎します。

日 時 平成7年6月14日(水)
午後6時30分開演
午後9時頃終演予定

会 場 京都会館第2ホール
京都市左京区岡崎最勝寺町
(市バス・東山二条下車)

名 称 NEW YORK が震えた津軽の三
弦 ―山田千里の世界―

演 奏 者 山田千里 福士りつ 渋谷和生
茂木俊興 楳本陽子 西 元

プログラム

山田千里 作曲：唸るぶんぶ(ソロ)

津軽民謡 : じゃんから節・よされ
節・小原節・あいや節・
津軽三下り(ソロ)

津軽民謡 : あいや節・よされ節・十
三の砂山(ヴォーカル)

津軽民謡 : じゃんから節イムプロ
ヴィゼーション(ソロ)

一 休 憩 一

山田千里 作曲：いもなも なんとかた
(合奏)

津軽民謡 : 津軽五大民謡の前奏曲の
紹介

山田千里 作曲：吹雪(デュオ)

(主な演奏者の略歴)

山田 千里

1931年青森県鯉ヶ沢町に生まれる。45年、津軽三味線を手にし、独力で稽古を始める。46年、福士政勝の演奏に感動し彼の旅巡業に加わる。49年4月、「津軽民謡団」を組織、独立し

各地で興行する。64年、旅興業に終止符を打ち、弘前市にライブハウス「山唄」を開業。福士りつと結婚。74年、津軽三味線の演奏会に出演するために上京。ブタベスト、ウィーン、パリほかで演奏。またテレビ出演も頻繁となる。82年4月、「津軽三味線全国大会」を企画・開催。8月、ニューヨークで、ジャズドラマー、エルヴィン・ジョーンズと初めて共演する。90年9月、NHK衛星放送「津軽三味線フェスティバル IWAKI」に出演。「NHK紅白歌合戦」に出場する等、津軽三味線の第一人者として活躍中。

福士 りつ

1930年青森県鯉ヶ沢町に生まれる。父親の歌う民謡を聴いて育ち、唄い手を志す。47年、津軽民謡界の大御所、原田栄次郎師に入門。53年、第17回青森県民謡大会で念願の第1位を獲得し一躍その名声が広まる。58年、青森放送主催・青森県民謡王座決定戦に出場、第1位となり第5代目の「民謡王座」に輝く。90年9月、NHK衛星放送「津軽三味線フェスティバル IWAKI」に出演。「NHK紅白歌合戦」に出場し、《あいや節》を披露する等、津軽民謡の唄い手として活躍中。

渋谷 和生

1970年青森市に生まれる。86年、山田千里師の内弟子となる。89年、津軽三味線全国大会でA級チャンピオン。91年5月、津軽三味線全国大会10周年記念特別企画山田千里杯争奪戦大会でチャンピオン。津軽三味線の将来を担う若きホープとして期待を集めている。

入場無料

備考：学生証又は職員証を持参して下さい。

定員は950名先着順とします。

(学生部)

